

図3に平成二十六〜二十八年の放流状況を示しました。放流日（放流期間の中央日）を横軸に、平均体重を縦軸にして、放流時期とサイズを種苗毎に比較しました。

平成二十八年の特徴として、天然種苗は近年に無く早期に遡上したため、前年より二十日前後早く放流しています。また、実際に河川を遡上したアユも早期に生育場（漁場）に到達したと考えられます。人工種苗について、水産振興協会村上事業所から漁協中間育成施設に搬入した種苗は、大変順調に成長し前年より二週間程早く、更にこれまでより大型サイズで放流しています。他県産種苗は前年よりやや遅く、型は通常サイズでほぼ例年並みの放流でした。

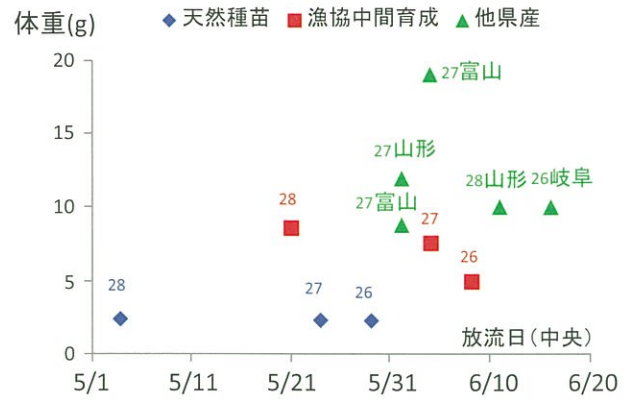


図3 アユ種苗の放流日とサイズ（体重）

平成二十六〜二十七年の天然魚の割合は、放流数よりも試し釣りの方が高くなっています。平成二十八年は、天然種苗が早期に河川を遡上し、野積産種苗の放流も早かったことから、試し釣りで天然魚の割合が高くなっても良さそうに思います。しかし、結果は人工種苗が九割以上になり、河川内の生育競争で人工種苗が天然魚を上回り、大きく成長したと考えられます。ここで注目したいのが漁協中間育成種苗です。平成二十八年は五月中旬〜下旬に約九グラムで放流しており、図3から見ても早い時期に大型サイズを放流したことが一目でわかります。他県産種苗は例年並みの放流でしたので、これが試し釣りまでに急激に成長したとは考えにくいと思います。また、平成二十七年の試し釣りでは富山県産人工種苗の割合が高くなっていますが、六月上旬に放流した一九グラムの大型種苗が関係していると推察しています。

このような状況をまとめて見ると、平成二十八年漁期の大型アユの好漁は、天然遡上が早く、一部大型の天然魚があったものの、漁協の中間育成が大変順調で大型種苗を早期に放流できたことが最も大きな要因と考えられます。

平成二十六年〜二十七年の天然魚の割合は、放流数よりも試し釣りの方が高くなっています。平成二十八年は、天然種苗が早期に河川を遡上し、野積産種苗の放流も早かったことから、試し釣りで天然魚の割合が高くなっても良さそうに思います。しかし、結果は人工種苗が九割以上になり、河川内の生育競争で人工種苗が天然魚を上回り、大きく成長したと考えられます。ここで注目したいのが漁協中間育成種苗です。平成二十八年は五月中旬〜下旬に約九グラムで放流しており、図3から見ても早い時期に大型サイズを放流したことが一目でわかります。他県産種苗は例年並みの放流でしたので、これが試し釣りまでに急激に成長したとは考えにくいと思います。また、平成二十七年の試し釣りでは富山県産人工種苗の割合が高くなっていますが、六月上旬に放流した一九グラムの大型種苗が関係していると推察しています。

【種苗の運搬と中間育成】

魚沼漁協の中間育成は、水振協村上事業所で一グラム程の種苗を水槽に積み込み、伊勢島の施設まで運搬することから始まります。狭い水槽で大量の種苗を運びますので、大変気をつかう

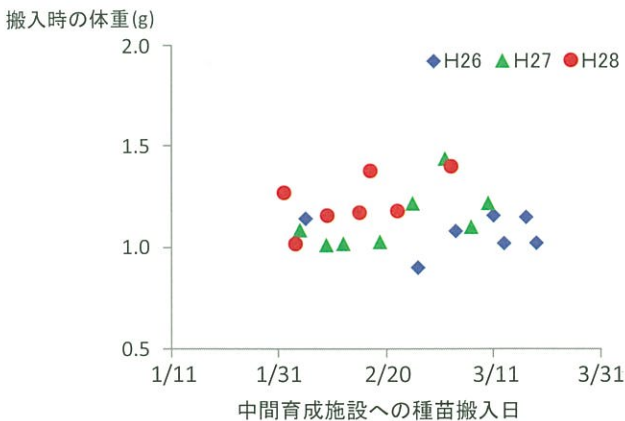


図4 中間育成施設への搬入日とサイズ



写真1 運搬水槽に収容したアユ種苗

作業です。収容密度や水温はマニュアルなどの数値を参考にできますが、酸素の調節はそう簡単ではありません。一般的には、酸欠が心配で酸素を出し過ぎて種苗にダメージを与えてしまうことが多いように思います。中間育成では収容時につまづくとその後の成長にも影響しますので、酸素調整などの運搬技術の向上は重要です。

また、平成二十八年はやや大きい種苗を搬入し、かつ（図4）、前年より二週間も早く放流サイズに仕上げているので、種苗の搬入から飼育・放流に至るまで、十分な技術が備わってきていると思います。

【おわりに】

大型種苗を早期に育成・放流することで、解禁後は大型の人工アユが釣れ、漁期中〜後半は徐々に天然アユも増えて、漁期を通して楽しめる漁場になっていくのではないかと思います。そのためにも、中間育成などの技術の向上と、その継承が大切です。今後、大型種苗の早期放流によって、平成二十八年のように解禁時から大型アユが見込めるようになれば、解禁日の前倒しについても検討してみたいかがでしょうか？

新潟県内水面水産試験場